

マヌエ島の記録

齋藤馨児*

マヌエは、目もくらむほど白く光る、砂の浜に囲まれた島だ。とお目には一面の椰子林と、灌木の繁みしか見えぬが、上陸してみると、椰子の下に思いがけずきちんとした、数戸の家がある。ここでは灌木がさっぱりと払われ、芝生さえ育ててある。椰子は5mに1本ほどの割できれいに植林してある。このようすは、無人島で暮す覚悟のわれわれを、少なからず安堵させた。熱帯風土病への警戒心も薄らいだが、それは誤りでは無かった。20人足らずいたポリネシアの半裸の男たちは、若く健康で、清潔な感じがしたし、じじつある晩、彼等の合宿の住まいを訪れてみて、確かめもできた。倉庫のように大きくがらんとした家で、裸電灯の下に蚊張を釣ったベッド、使い古した腰掛、網戸つきの食物棚があるだけだったが、広い床は夜目にも白く、砂が敷きつめられ、塵一つなかった。ここはよい土地で風土病はない、といったことを彼等は話してくれた。

マヌエは静かな淋しい島である。季節が秋にあたってもいたが、花は少なく、そもそも椰子以外に目だつ植物が見あたらぬ。しかし風のない日、林のなかには何かの花の芳香が漂い、夜はこおろぎの音がしきりとした。風の強い夜は、椰子の葉ずれをいつも雨の音と聞き違えた。

雨はよく降ったが、居住区の水はけは良かった。激しいスコールのとき雨水が流れても、すぐ滲みこんで溜るといことはない。観測区は石灰岩化した古い珊瑚や貝殻で、ごつごつと一面に覆われていた。これを除くと、褐色の石灰砂で、砂を引掻きまわすと、ときどき茶色のさそりが現われた。5cm たらずの小形で、尾の先の一節が白く、小さな針が確かにあった。蚊はどこでも多かった。ことに便所ではひどくやられた。小形の弱々しい蚊だが、追っても執拗に刺しにくる。はえ、ごきぶりがいて、死魚などはすぐにうじがわく。ごきぶりは荷物にはいりこみ、帰途、船倉へまでもぐりこんできた。サンドフライが、島の反対側の、浜辺に近い椰子林でみつかった。昆虫を撲滅するため、スミチオンという新薬を撒いたり、下草に石油をかけて燃す計画もあったが、思ったほど実行できなかつたようだ。

水不足は、心配したことの一つだ。飲み水と炊事の水は、ドラム缶で持ちこんだ分(1人1日10l)でまかなえた。この水は、次亜塩素酸ソーダをいれ消毒して使ったが、1週間目から、ドラム缶のさび止めの亜鉛が水酸化物のおりを作り、水をにごらせた。雑用水のために

は、ほとんど毎日スコールがきた。天幕のフライから流れ落ちる水が、早いときは10分でバケツ一ぱいに溜った。だがいれ物の数が足りず、2日天気が続くと、水は不足した。フライの水は、口に含むとひどくしぶく、石鹼は泡だたない。たぶん、新調の天幕の防水剤が溶けてたのだろう。キャンプから700m離れた島の中央に湿地帯があった。直径30mの沼が、いぐさのような水草に囲まれていた。膝ほどの沼の底は石灰と泥土だが、水は澄み、真水で、小魚がいた。この水も雑用水に使った。土人がそうしているように、沼のまわりで水浴もした。夕闇のころは蚊が無数にいた。

マヌエの海は美しい。晴れた日は、向い島(アイオツ)との間の浅い礁湖が、太平洋の深青とはっきり区別される明るい青に光った。このなかにはたくさんの魚がいて、青、黄、ときには赤などの縞模様の、絶えぬ流れをつくった。外海に向う珊瑚礁の根は、外側で急に深くなって、大魚が泳いでいるらしく、土人は見るまに30cmもある魚を何匹も突いて捕えた。どの魚も焼いて食うと、美味であった。しかし土人の食糧だということで、外来者が捕えたり食べることは、公式には禁じられていた。

われわれの食事は、高速凍結乾燥食品会社(ジフィーK.K.)の製品が用意され、その献立によって調理されることになっていた。乾燥品ながら栄養価は落ちず、味や舌ざわりも変わらぬという会社の宣伝は、うそとはいえない。オムレツやカレーやシチューなどの味は上々だったし、野菜はいま湯をくぐってきたように青々として、期待どおり、食事は旨かった。だが、昔ながらの乾燥食品や、缶詰を棄てるのはまだ早い。勝手のちがう材料ばかりを前に、みんなの口に合うものを作りあげようという、コックさんの仕事は容易ではなかつた。

マヌエ土人は、植林地の管理人2人をふくめて、100マイル南のラロトンガ島からきている。ちょうど、1年契約の出稼ぎが半分過ぎたところときいた。彼等は、管理人を明らかにおそれ、白人からは差別されていたが、差別意識のないわれわれとは親しかった。とりわけ、ドクターがいたため、人気を博した。彼等は人がよく、歌がうまかつた。話好きで、身の上話や親族の話を好んでした。夜更けてどこかのテントから、ウクレレや土語の歌声のもれてくることも、まれでなかつた。出港の日、彼等はカヌーを本船の近くまで漕ぎよせて、別れを惜んだ。

* 東京天文台